

研究ノート

『未来看護塾』の活動および「人と関わる体験」が看護学生へもたらす効果



伊丹 君和¹⁾、鈴木 絵夢²⁾、高見 紀江³⁾、豊田久美子¹⁾、
久留島美紀子¹⁾、本田可奈子¹⁾、江藤美和子¹⁾

¹⁾滋賀県立大学人間看護学部

²⁾聖隷三方原病院

³⁾兵庫医科大学病院

背景 未来の看護を担う看護学生が他者との交流やさまざまな体験を重ねることは、生活援助の必要性に気づく「感性」を育てることにつながると考えている。

そこで筆者らは、人々との交流やボランティア活動を通して「未来の看護のあり方」を志向する、看護学生主体の活動グループ『未来看護塾』を始動した。

目的 『未来看護塾』の活動の一端を振り返るとともに、ボランティア活動の体験が看護学生にどのような効果をもたらすのかについて、ボランティア活動の体験をもつ看護学生に実施した調査をもとに検討する。また、ボランティア活動に関わらず「人と関わる体験」は「他者意識」や看護職としての「職業意識」に影響を与えるのかについても検証する。

方法 1. ボランティア体験をもつ看護学生への調査

対象は本研究の趣旨に同意の得られた看護学生17名である。自由記述式質問調査として、ボランティア活動による学びなどについて質的に分析した。

2. 看護学生に対する大学入学後の「人と関わる体験」に関する意識調査

対象は看護学生186名とした。調査は、無記名式の自記式質問紙とし、大学入学後の人と関わる体験の有無、内的他者意識、看護職としての職業意識についてなどの調査内容とした。なお、回答は5段階評定とし、各関連を χ^2 検定にて分析した。

結果 1. 『未来看護塾』などのボランティア活動は、さまざまな「人と関わる」体験を重ねることとなり、参加している看護学生の「感性」を豊かにし、「コミュニケーション技術」の獲得や「自らの成長」へとつながる学びとなっている。

2. 看護学生における『内的他者意識』の合計点は、 $26.6 \pm 5.3/35$ 点と高値であった。また、大学入学後にボランティア活動を行っている者は33%であり、このような『人と関わる体験』を多く行っている者は、職業意識も高い傾向にあることが認められた ($p < 0.1$)。

3. 『未来看護塾』の活動は、「人と看護」の両方に関わる体験となり、学年の枠を超えて学生間でのミーティング、企画、実施、評価する体制の中で、「看護力」を向上させる。

結論 ボランティア活動は、「人と関わる」体験となり、参加学生の「感性」や「コミュニケーション力」を豊かにすることを明らかにした。中でも看護学生が行う『未来看護塾』の活動は、「看護力」を向上させるという教育的効果が得られることも示唆された。また、ボランティア活動に関わらず、「人と関わる体験」は看護職としての職業意識に影響を与える。本研究によって、看護学生における『未来看護塾』の活動および「人と関わる体験」を支援することの重要性を再認識した。

キーワード 人と関わる体験, 教育効果, 看護学生, ボランティア

2007年9月26日受付、2008年1月30日受理

連絡先：伊丹 君和

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail：k-itami@nurse.usp.ac.jp

I. はじめに

近年、若者の生活体験や対人関係の乏しさが問題視されているが、看護学生の生活体験や対人関係に関する研究は少ない¹⁾⁻⁴⁾。また、現在の看護教育カリキュラムにおいては、看護の対象となるその人の生活を知り、さまざまな人々との関係作りを学ぶ体験ができる科目は限られている。そのような中、生活者の視点でその人のニーズを把握し、援助の必要性に気づく「感性」をいかに育てるかは、これからの未来の看護を担う看護学生には特に重要であると考えられる。

一方、筆者らは、他者に対する意識や「関心」を向ける「他者意識」⁵⁾が高い看護学生は、入学前に「サークル活動」や「ボランティア活動」などの体験が多いことを明らかにしている⁶⁾。また、より社会的な対人関係を体験することが、社会的スキルの向上に有効であり、社会的スキルと自己効力感の関連が高いということも示されている⁷⁾。このほか、看護学生のボランティア活動の参加は、人々や地域への理解を深めること、自らの職業への意欲を高めることが報告されている⁷⁾。

そこで、人々との交流やボランティア活動を通して、人が人として生きていくその生き方を支える「未来の看護のあり方」を志向するという『未来看護塾』を、平成16年に始動した。この活動は、大学や看護教員の支援を受けながらも主体は活動の趣旨に賛同した有志看護学生である。現在では活動の目標も、1) さまざまな体験を通して、自らの「感性」や「人間性」を豊かに育み「看護力」の向上を目指す、2) 【定期的なボランティア活動】を通して、人々の健康へのニーズを充たす環境づくりを考える、3) 【生き生き健康支援活動】を通して、地域の人々の健康レベルや発達段階に応じた活動の機会を提供し健康増進のきっかけを作る、4) 地域の人々や看護職の人々との交流を深めることで地域に根ざした活動を行っていく、という4つに集約されている。

今回は、そのような『未来看護塾』の活動の一端を振り返るとともに、ボランティア活動の体験が看護学生にどのような効果をもたらすのかについて、ボランティア活動の体験をもつ看護学生に実施した調査をもとに検討する。また、ボランティア活動に関わらず「人と関わる体験」は「他者意識」や看護職としての「職業意識」に影響を与えるのかについても検証する。

II. 対象および方法

1. 『未来看護塾』の活動概要

未来看護塾は、2年生の執行部を中心として、1年生から4年生まで約80名の看護学生が所属し、以下のような活動を主に実施している。

1) 地域で生活する人々および医療に携わる人々との交流【定期的なボランティア活動】

- ① A市立病院の小児病棟における入院患児との「遊び」や看護援助を通しての交流（平日の夕方）
- ② A市立病院の緩和ケア病棟における入院患者および家族との交流、ティーサービス、レクリエーションの実施（月に1回程度）
- ③ 特定非営利活動法人NPO団体における高齢者や親子との交流（平日および土曜日、時間は活動内容によって異なる）（図1参照）

2) 未来看護塾企画の地域で生活する人々への【生き生き健康支援活動】

- ① 入院患者を対象として…A市立病院小児病棟でのクリスマス会の企画実施（図2）
- ② 親子を対象として…地域子どもフェスティバルやキッズフェスティバルなどへの参加、大学祭での“こども広場”の企画実施



図1. NPO団体と連携しての親子活動



図2. 小児病棟でのクリスマス会の企画実施

- ③ 高齢者を対象として…地域長寿会での健康支援活動の企画実施 (図3)
 - ④ 障害児を対象として……NPO団体企画のピクニックに参加など、子どもとの交流
- 3) 地域市民および医療に携わる人々との「未来の看護



図3. 地域長寿会での健康支援活動の企画実施

のあり方」についてのミーティング

- ① A市立病院の看護職や地域のボランティアスタッフと教員および学生を交えてミーティングの実施 (年に数回)
- ② 未来看護塾の学生間でのミーティングの実施 (月に数回)

なお、学生間のミーティングを通して、実施学生の記録や感想をもとにした各活動の評価を行うとともに、対象者への安全・安楽を確保したものであるかの検討を中心に、各活動の企画案作成とその準備など、1年生から4年生までが支え協力しあいながら企画実施および評価する体制をとっている。

2. 対象と方法

1) ボランティア活動の体験をもつ看護学生へのボランティア活動の実際に関する調査

本調査の対象は、大学入学以降、『未来看護塾』などのボランティア活動を行ってきたS県内の4年制大学看護系学部在籍する2年生から4年生までの看護学生17名であり、調査時期は2006年9月～11月である。

調査内容は、1. ボランティア活動の体験による学び、2. ボランティア活動が看護学生に与えたもの、3. ボランティア活動を促進させるための支援策についてであり、方法は自由記述質問紙による調査とした。

分析は質的研究とした。その方法としては、記述内容をひとつの記録単位とし、その単位に関する意味的特性

を推論した後、文脈上同義的とみなせるものを集めて文脈的表象を付した。その後、類縁性を有する説明概念はカテゴリーとしてまとめ、分析の際には研究者が意味論的な妥当性を熟考しながら記録単位を分類するとともにカテゴリー名を抽出した。

2) 看護学生に対する大学入学後の「人と関わる体験」に関する意識調査

対象は、本研究の趣旨に同意の得られたS県内の4年制大学看護系学部在籍する1年生から4年生までの学生186名とした。調査時期は2006年9月～11月である。調査は、無記名式の自記式質問紙とし、調査内容は、1. 属性 (学年、志望動機、志望職種等) の把握、2. 大学入学後の「人と関わる体験」(佐藤ら¹⁾、野崎ら²⁾、伊丹ら³⁾の研究を参考に調査項目を作成)、また、先行研究をもとに、3. 内的他者意識 (辻⁴⁾による他者意識尺度の中の「人の考えを絶えず読み取ろうとしている」等の『内的他者意識』(表1参照) 7項目を用いた)、4. 看護職としての職業意識 (波多野ら⁵⁾の尺度をもとに作成(表2参照))とした。

表1 内的他者意識尺度(1993 辻による)

1. 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない
2. 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている
3. 人の考えを絶えず読み取ろうとしている
4. 人の言動には絶えず注意を払っている
5. 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう
6. 人の気持ちを理解するように心がけている
7. 他者の心の動きをいつも分析している

表2 看護職へのアイデンティティ尺度

1. 将来、看護職の仕事長く続けたい
2. 看護の仕事は私に合っている
3. もう一度職業を選べるとしたらまた看護の仕事を選ぶ
4. 高校生に「看護職になりたいが」と相談されたら勧める
5. 看護の仕事に誇りを持っている
6. もっと看護についての勉強がしたい
7. 看護の道を選んだことに満足している
8. 看護職として仕事することに自信がある
9. もっと看護の技術をみがきたい
10. 私の子供が看護職になりたいと言ったら勧める
11. 私の仕事は私の能力を生かせる
12. 看護に生きがいを感じている

なお、「人と関わる体験」、内的他者意識、職業意識についての回答方法は5段階評定とし、各平均点をもとに高得点者と低得点者に分類した。

分析は、学年比較については等分散を確認後、t検定を行った。このほか、1) 属性と内的他者意識・職業意識との関連、2) 入学後の「人と関わる体験」と内的他者意識・職業意識との関連、3) ボランティア活動の実施状況とボランティア活動に対するイメージ、職業意識との関連を中心に、SPSS 12.0 for Windowsを用いて、各高得点者との χ^2 検定を行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、参加者の自由意志による参加、拒否する権利、不利益の回避、プライバシーの保護や安全性等を保証するよう努めた。倫理的配慮事項は依頼書に記し、口頭、依頼書をもって参加者に研究の趣旨と内容および参加依頼について説明し、同意を得た。

III. 研究結果

1. ボランティア活動の体験をもつ看護学生へのボランティア活動の実際に関する調査結果

回答は、実際に大学入学以降、『未来看護塾』などのボランティア活動の体験がある、または現在も行っている看護学生17名(2年生8名、3年生4名、4年生5名)から得た。

1) ボランティア活動の体験による学び

まず、「楽しい、うれしい」と感じたボランティア活動の体験による学びとしては、表3に示すように、さまざまな人々と関わることにより、人々の思いや考え方を知り『人々を理解すること』を学び、障害者との関わりや人と人との関わり大切さを感じることで『人と関わるということ』を学びとして捉えていた。

また、関わりの中で対象者との心が通じたと感じられる瞬間や人々の喜びや笑顔をみることができたときにそれが自分の喜びとなり『感性が豊かになる』、人々と一緒に過ごし楽しむことで『人と関わることの楽しみ』についても学びとして感じていることが明らかとなった。

一方、実際に、病院や施設でさまざまな人と関わる中で、その人にあったコミュニケーションの方法を考えることによるコミュニケーション能力の向上、これからの看護に役立つという思いや知識が深まったといった学びの深まり、人のために役にたちたいという思いが強くなったなどといった『自らの成長』や、ボランティア活動に参加することで、ボランティア活動による対象者への効果や、ボランティア活動に対する意欲の向上、ボランティア活動に対するイメージの変化、ボランティア活動の方

法について考えるといった『ボランティア活動に対する考え方』も学びとして捉えていた。

また、「つらい、困難であった」と感じるボランティア活動による学びにおいても“楽しい、うれしい”と感じたボランティア活動による学びと同じような『感性が豊かになる』などの学びを得ていた(表4)。「つらい、困難」と感じた体験をしても、その関わりの中で自分自身の課題をみつけ、失敗だけに目を向けてはいけないうといった思いがこれからの意欲へとつながり、『自らの成長』となっていることが明らかとなった。また関わりを通して自分の考え方への変化や、人と関わる姿勢を改めて考えたといった『さまざまな物事に対する考え方の変化』も学びとして得ていた。

2) ボランティア活動が看護学生に与えたもの

ボランティア活動が看護学生に与えた影響を分類した結果、表5に示すように、ボランティア活動を通してさまざまな人と出会い、関わるという『さまざまな人との出会いやふれあい』そのものが、学生自身に意味のあるものであった。ボランティア活動によって、人と関わり、さまざまな体験をすることは、自己の勝手なイメージや偏見を意識できたというような自分自身について『考える機会』や、体験から看護を『考える機会』や、他の分野への興味・関心を抱くことともなり、『新たな視点、視野を拡大』していた。

また、対象者に喜んでもらえる自分もうれしいというように『相手の喜びは自分の喜び』となり、体験を通して、教科書だけでは学べない体験や自信につながっていた。そして、それらの体験はより深く学びたい、いろいろなことに挑戦してみたいという学生の意欲を引き出す『自己成長』の場ともなっていた。

一方、このようなボランティア活動に参加することは、『ボランティア活動に対するイメージを変える機会』ともなっていた。

3) ボランティア活動を促進させるための支援策

今後、ボランティア活動を促進させるための支援策としては、表6に示すように『具体的なボランティア活動を知らせる』、『ボランティア活動を体験してもらう』、『ボランティア体制の整備』という3つのカテゴリーに分類することができた。

『具体的なボランティア活動を知らせる』では、ボランティア体験を実際に共有する機会をつくり、具体的などのような活動を行っているかということを見てもらうことや、「ボランティア活動に対する興味をもってもらう」ことが必要であるという回答が得られた。また、『ボランティア活動を体験してもらう』では、ボランティア活動に参加するきっかけを提供し、参加して

表3. 楽しい、うれしいと感じたボランティア活動による学び

| カテゴリ(大分類) | サブカテゴリ(小分類) | 文脈的表象 | |
|-----------------|---------------------|--|--|
| 人々を理解するという事 | 人々の考え、思い、特徴を知る | 対象者の感性が、すごく優れているということがわかった 自分がまず楽しむことで子どもたちが集まってきてくれる 体を動かして遊ぶことは、子どもたちは本当に好きであると感じた | |
| 人と関わるということ | 学生という立場で関わることの特権 | 看護学生として、きょうだいや施設のスタッフといった立場とはまた別の立場・視点でかかわれた | |
| | 人と人との関わりの大切さ | 自分たちからも“ありがとう”とイベントに参加してもらったことに対する感謝を言うことが大切である “ありがとう”の言葉を交わす大切さを知った | |
| | 障害者への自然な関わり | 障害をもっている、いろいろな子がいること、健康といわれる子どもたちとも変わらないことがわかった | |
| 感性が豊かになる | 自分の喜び | 活動を通して、心が通じた方の思える瞬間があった 子どもたちの楽しんでいる姿、喜んでる姿をみてうれしかった “ありがとう”また来てや”と言ってもらい、うれしかった 1人でできないことをみんなで協力して成し遂げる喜び | |
| | | 充実感 | 充実感をえられる |
| 人と関わることの楽しみ | 楽しむ | 最初は不安もあったが、とても楽しむことができた 子どもたちと一緒に過ごす時間を自分が楽しむこと | |
| | | 一緒に楽しむ | コミュニケーションを通して、一緒に楽しむことが大切だと感じた 短い時間のかかわりでも、仲良くなれることがわかった |
| | 出会い | 子どもたちとの出合いを大切にしたいと思った | |
| 自らの成長 | コミュニケーションの方法 | 自分から心を開いていけば、相手に伝わって相手も心を開いてくれるということがわかった 自分のペースでかかわるのではなく、相手に合わせたかかわり方で関係が変わる どんな障害があっても、きちんとその子を認めて、一人ひとりにきちんと向き合うことが大切 言葉が伝わらなくても、笑顔やジェスチャーで十分伝わること 子どもの素直な一生懸命な気持ちに応えるように、笑顔でかかわっていくことの大切さを学んだ | |
| | | コミュニケーションをはかるといこと | 何回かかかわるとい積極的なかかわりが必要だと思った 自然体で、同じ目線に立って一緒に同じものをみたり、体験することが大切である |
| | | 学びの深まり | 自分の看護活動に活かすことができと思う 地域に生活している高齢者とふれあい、身近に感じることができた。 |
| | | 人のために役に立ちたい | ボランティア活動をすることによって、自分でも誰かの役に立つことができる |
| ボランティア活動に対する考え方 | ボランティア活動に対するイメージの変化 | ボランティアに参加するまでは、知識や技術というものが大切だと思っていた 対象者から、ありがとう(感謝の言葉)を言ってもらえることがボランティアの目標でもあると学んだ | |
| | ボランティア活動に対する意欲の向上 | これからもがんばろうという気持ちをもたらした | |
| | ボランティア活動による対象者への効果 | 高齢者の楽しいときの笑顔や一生懸命な姿をボランティア活動を通して引き出せるということがわかった 高齢者と若者が交流できる機会をもっと増やしていくことが互いにより刺激になる | |

表4. つらい、困難と感じたボランティア活動による学び

| カテゴリ(大分類) | サブカテゴリ(小分類) | 文脈的表象 |
|--|-----------------|--|
| 人々を理解すること | 実感として新たな発見 | 子どもたちは、一人ひとり違った興味を持っている |
| | | 障害によって、伝達手段が自分たちとは違うのではないかと考えることができた |
| 人と関わるということ | そのときの対応についての気づき | 子どもたちがふざけたときにはきちんと注意することが大切 |
| | | 子どもたちに、順番待ちなどきちんと説明したら、守ってくれたので、目を見て、対等に話すことが大切 |
| | コミュニケーション技術 | たくさんの子どもたちと遊ぶときには、全体に目を配ることが大切である |
| 感性が豊かになる | 笑顔を見る喜び | 笑顔を見ることができた |
| | | 笑顔を見ていて、自分もうれしくなった |
| | 新たな出会いの喜び | 戸惑いがあったが、多くの人に出会うことができた |
| さまざまな物事に対する考え方の変化 | 考えの転換 | 時間をかけて、その人と接することで、少しずつでも、その人のことがわかるようになればいいと思えるようになった |
| | | 人にかかわるときの姿勢について考えた |
| 自らの成長 | 自分自身の課題の発見 | 自分自身の課題を見つげられた |
| | これからへの意欲 | これからちゃんと血圧測定できるように練習をしようと思った |
| | | 失敗だけに目を向けてはいけなかった |
| | 新しい視野 | 一つ一つの行動には必ず意味があるとわかった |
| 人に会ったとき、最初の第1印象によって、その後の関係とか雰囲気が大きく変わることを感じた | | |
| ボランティア活動に対する考え方 | ボランティア活動を行う姿勢 | あなたと関わりたいという姿勢、気持ちが足りなかったら、かかわれないと感じた |
| | | ボランティア先との連携体制を整備を十分にしておくことが必要だと考えた |
| | | ただ単に、「ボランティアに来ました」というのではなく、ボランティアの目的や内容をしっかり考えてから行くことが大切 |
| | | ボランティア活動は行くことよりも何かすることに意味があると感じた |

表 5. ボランティア活動が看護学生に与えたもの

| カテゴリ(大分類) | サブカテゴリ(小分類) | 文脈的表象 | |
|-------------------------|-----------------------------------|--|---|
| さまざまな人との出会いや 関わり | さまざまな人との関わり | 普段自分の生活の中ではかかわれないさまざまな人たちとかかわれる 人とかかわることが楽しくなり、人を好きになれた さまざまな人がいることを知ることができた | |
| | 多くの人と出会うこと・ 関わることの大切さ | 人と出会うことにも多くの意味がある 人とかかわる機会が増えてよかった | |
| 考える機会 | 看護を考える機会 | 自分の目指すべき看護観を考えることができた ボランティアを通して、地域の高齢者とかかわることで、地域の高 齢者の生活を予測しやすくなった | |
| | 自分自身について生き 方や人生、価値観につ いて考える | 自分もっていた勝手なイメージや、偏見を意識できた ボランティア活動を通して自分自身について、生き方、人生につ いて考えるようになった | |
| 新たな視点、視野を拡大 | 新たな活動へのきっかけ | 実際に、ほかのボランティア活動や海外に行ってみたりした | |
| | 新たな興味、関心 | ほかの分野への興味・関心を抱くことができた 看護の対象としてではなく、地域に生活している同じ人として、接 することができた 地域での生活者としての視点を持つことができた ボランティアの私服の効果は大きい 今まで気づけなかったことや、違った視点からの考え方を得ること ができる ボランティアという立場だからこそ、職員や実習生では発見しにく いこと、気づくことができた | |
| 相手の喜びは自分の喜び | 自分の喜び | 喜んでもらえる、自分もうれしい 子どもの笑顔を見ることで、幸せな気持ちになった | |
| | 自分の楽しみ | 子どもたちとかかわることで、自分自身も楽しむことができた | |
| 自己成長 | 自分の変化 | 人とコミュニケーションをとるといふことの緊張感や抵抗が減った 積極的になった 自分自身の自信につながった | |
| | | たくさんの人に出会うことで、新しい人と出会ったときにも自然に接 することができるようになった | |
| | 実感としての学び | スタッフから注意点やポイントを言ってもらえる 教科書だけでは学べない多くの経験をできる 個別性の援助の重要性といったものを学んだ 人間関係を築く難しさや大切さを知った 子どもたちが変わっていくのを見ることができた 病院での実習では、対象者の家での生活を見ることが困難であっ たが、ボランティア活動では、地域での生活を見ることができる ボランティアをする立場、ボランティアする学生を集めてまとめる立 場を体験したことで、リーダーシップの取り方を学んだ | |
| | | 自己課題の発見 | 自分自身に足りないことがたくさん見つかった |
| | | コミュニケーション能力 の向上 | ボランティアを行って、コミュニケーションスキルが身についた 人とどのように接していいかが、ボランティアの経験を重ねること で、感覚としてわかるようになってきた |
| | | 意欲の向上 | 学んだことを次のボランティアで活かす いろいろなことに挑戦してみようという気持ちになった 次も参加したいという気持ちになった より深く学ぼうとする意欲も出てきた |
| | ボランティア活動に対する イメージを変える機会 | ボランティア活動のおもしろ さ・大切さの発見 | ボランティアのおもしろさ、大切さを感じた |
| ボランティアは自己犠牲す るものではない | | 無理しなくても、楽しむことが大切だとおもった | |

表6. ボランティア活動を促進させるための支援策

| カテゴリ(大分類) | サブカテゴリ(小分類) | 文脈的表象 |
|--|-------------------------------------|--|
| 具体的なボランティア活動を知らせる | ボランティア活動の実際を見てもらう | ボランティアをやっている人の楽しんでいる姿をみてもらうこと |
| | | ボランティア活動の場を見学 |
| | | ボランティア活動を行っている人の話を聞く |
| | | どのようなボランティアがあるのかを、もっと広く知ってもらう、知らせる |
| | | ボランティア活動によって得られる喜びや学びを具体的に伝える |
| | | ボランティア経験、体験を直接聞く機会の提供 |
| | | 具体的に、どんな風にやっているのかを示す |
| | | 何をしているかわかれば参加しやすい |
| | | ボランティアを特別なことではなく、もっと身近に感じてもらえるように、ボランティアをしている姿をみてもらう。 |
| | | ボランティアの活動を伝える |
| | ボランティアの場を広く宣伝する。 | |
| | 自分の地域など身近な場でのボランティアの情報がすぐ手に入るようにする。 | |
| | 興味・意欲をもってもらう | 興味をもってもらう |
| | | 自分たちで企画する |
| | | |
| ボランティア活動を体験してもらう | きっかけ | 行くきっかけがない きっかけをつくる |
| | 参加してみる | 気軽に関心のある分野から参加してみる |
| | 一緒に参加できる人がいること | 複数で参加する |
| | | 身近な人を誘う |
| | | 一人で参加するのは不安である 参加しやすい雰囲気 |
| | 誰にでもできるということを感じてもらう | 自分たちが行いたいことから始める 誰にでもできるというように感じてもらう よくわからない状態では、自分にできるか心配 |
| | ボランティア体制の整備 | ボランティアの内容を調整する |
| 内容の多様化 | | |
| いろいろな分野のボランティアがあればいい 身近で気軽に参加できるボランティアがあること | | |
| ボランティア受け入れ先との連携強化 | | 学生とボランティア先の連携強化 |
| | | ボランティア趣旨をボランティア受け入れ先に理解してもらう ボランティア先からの要望も取り入れる |
| ボランティア活動は強制するものではない | 自己犠牲ではないこと | 無理をしなくてもいいよ、という心の支え |
| | やりたい人がやればいい | ボランティアは希望者が参加すればよい |
| | | 多くの学生が参加する必要はない |
| | | 自分のやりたいことがある人がやればいい |

もらうことが必要であるといった回答が得られた。実際にボランティア活動に参加するきっかけがないため、一人で参加するのは不安であるとの回答もみられた。

そして、学生とボランティア受け入れ先の連携を強化し、学生が興味のあるさまざまな分野の「ボランティア活動の内容を調整」していくことが必要である。

また、ボランティア活動は希望者が参加すればよい、多くの学生が参加する必要はないといった『ボランティア活動は強制するものではない』という回答も得られた。

2. 看護学生に対する大学入学後の「人と関わる体験」に関する意識調査結果

回答は、1年生61名、2年生47名、3年生41名、4年生37名の看護学生計186名から得られた（回収率77.2%）。

1) 属性と内的他者意識・職業意識との関連

『内的他者意識』の全体の合計点は、図4に示すとおり、 $26.6 \pm 5.3 / 35$ 点であった。また、職業意識の全体の合計点は、 $42.9 \pm 7.4 / 60$ 点であった。学年別の職業意識合計点は、看護学部に入學して間もない1年生が 44.3 ± 6.1 点と最も高く、2年生で 43.3 ± 8.4 点、3年生で 40.6 ± 8.1 点と最も低くなり、4年生で 42.9 ± 6.8 点と再び高くなるという結果が得られた。

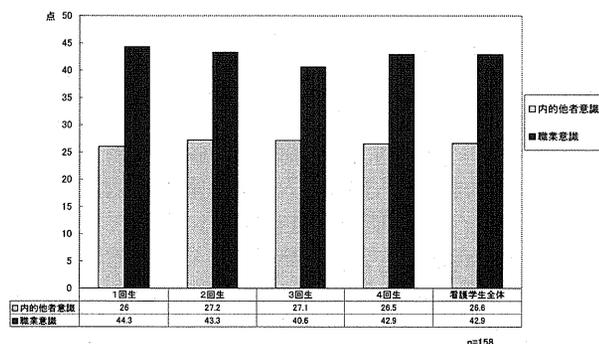


図4. 他者意識・職業意識合計得点の比較

2) 入学後の「人と関わる体験」と内的他者意識・職業意識との関連

大学入学後にサークル活動や部活動を行っている者は全体の62%であり、アルバイトを行っている者は全体の83%と最も多く、ボランティア活動を行っている者は33%であった。サークル活動、部活動、アルバイト、ボランティア活動のいずれかを行っている者を「人と関わり」がある者とした場合、人と関わる体験のある者は全体の94%であった（図5）。

また、このような『人と関わる体験』のある者は、図6に示すとおり、職業意識高得点者の割合が58.8%であ

り、「人と関わる体験」のない者の高得点者の割合である22.2%と比較して高い傾向にあることが認められた（ $p < 0.1$ ）。しかし、人と関わる体験と内的他者意識との明らかな関連は認められなかった。

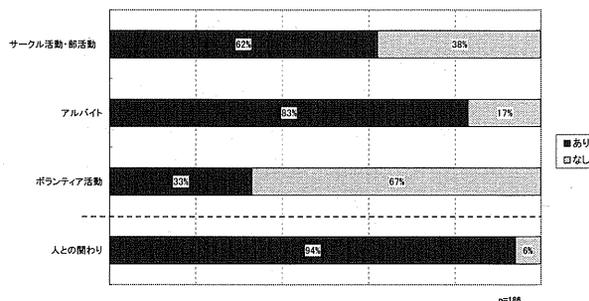


図5. 大学入学後の人と関わる体験

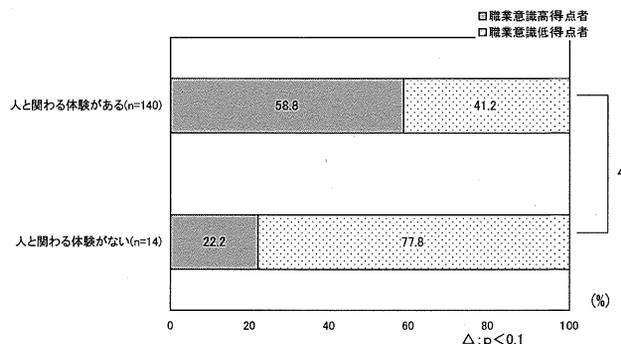


図6. 人と関わる体験と職業意識との関連

IV. 考 察

1. 『未来看護塾』などのボランティア活動が看護学生にもたらす効果

実際にボランティア活動を行っている者の多くは、ボランティア活動に対して“楽しい”というイメージを持っていた。これは、対象者から喜ばれた体験や一緒に楽しむ体験をした結果であると考えられる。しかし、ボランティア活動を体験した者でも“楽しい”というイメージをもっていない者もいる。これは、ボランティア活動を通して人と関わる中で、うまく人と関わるができなかったり、できない技術があったり、失敗という体験が生じるからであると考えられる。

このように、ボランティア活動を行うことは、“楽しい、うれしい”体験ばかりでなく、“つらい、困難”とも感じる。しかし、それらの体験から新たに、「対応についての気づき」「コミュニケーション技術」「自分自身の課題の発見」「新たな出会いの喜び」「考えの転換」

「新しい視野」など、さまざまな学びを得ていることが明らかとなった。野崎ら⁷⁾は、人と関わることに積極的になる経験と、自信をなくす経験を両方体験している学生は社会的スキルが高い傾向にあると報告している。

対象者に喜んでもらった体験は自分自身の存在感を実感でき、自尊感情にもつながる。三瓶ら⁸⁾は、ボランティアに参加する学生は、ボランティア参加中の子どもとの関係の良否とは関係なく、参加後の子ども理解は深まったと述べているように、ボランティア活動を体験することは、学生自身の「感性」を高めていると考える。これらことから、“人と関わることの楽しみ”を学んだということは、関わりの中で対象者を知り、理解した結果であると考えられた。

また、ボランティア活動を体験した看護学生は、『自己成長』を自ら感じ、看護職への意欲を深めていると考える。榎本ら¹⁰⁾も、ボランティア活動と自己教育力との関連性は認められないが、ボランティア経験のある看護学生は、「自信を持って、自ら学習できる」と述べている。

ボランティア活動を促進させていくためには、看護学生にボランティア活動を行うための姿勢にかかわる意欲や興味を引き出ししていくことが大切であると考え。そのために、まずボランティア活動に対する興味をもってもらうような働きが必要である。

また、ボランティア活動の実際を知ってもらうために、ボランティア活動の場を実際に見てもらい、ボランティア体験者とボランティア未体験者でボランティア体験を共有する機会をつくることも必要と考える。増田ら¹¹⁾も、学生のボランティア活動への意識を高めるには、ボランティア体験で学んだことを共有する場が必要と述べている。

今回の調査の中で、ボランティア活動に興味はあってもなかなか参加できない学生や、一人で参加するのは不安と感じている学生がいることが認められた。そのような学生のために、ボランティア活動を直接促し、ボランティア活動の参加へのきっかけづくりも必要と考える。実際にボランティア活動への参加意識は、ボランティア活動を一度でも体験したことのある者は、未経験者よりもその後の参加意向が高いことが指摘されている¹²⁾。したがって、ボランティア活動未経験者にボランティア活動を促していくことは、次への参加意欲につながると考える。また、より多くの学生が参加できるよう、「ボランティア受け入れ先との連携強化」し、「ボランティア活動の内容を調整する」といった『ボランティア体制の整備』も必要である。

ボランティア活動はあくまでも自発的な活動であり、強制するものではない。しかし実習以外の場で、ボランティア活動を通して人と関わることは、「感性」を高め、

看護職を目指す者としての資質を培うことができる貴重な場といえる。

2. 「人と関わる体験」が看護学生に与える影響

看護職としての職業意識では、1年生が最も高く、3年生で最も低くなり、4年生で再び高くなるという結果であった。これは看護短大の学生を対象とした波多野ら⁸⁾の調査と同様の結果であり、看護実習という体験が大きく影響していると考え。看護実習は、受持ち患者やその家族をはじめ、多くの医療スタッフと関わり合いながら将来看護職となる自分を磨き成長していく体験といえる。このような看護実習体験は、看護学生における「人と関わる体験」の集大成ともいえる。

一方、今回の調査によって、看護学生の多くがサークル活動や部活動、アルバイト、ボランティア活動を体験して人と関わりながら生活していることが明らかとなった。このように、「人と関わる体験」のある者は、看護職としての職業意識高得点者の割合が58.8%であり、「人と関わる体験」のない者の高得点者の割合である22.2%と比較して高い傾向にあることが認められた ($p < 0.1$)。

看護の対象は全人的に統合された人間であり、障害や疾病だけに注目するのではなく、その人がより健康に生活できるよう支援することが看護の役割と考える。看護職がその役割を果たしていくためには、まず、対象者との十分なコミュニケーションをはかり、信頼関係を築くことが必要である。このことは、専門的な看護を提供するうえでも大切であるが、「人と関わる」うえでの基本ともいえる。今後ますます看護職の判断力や責任能力の向上、さらに豊かな人間性や人権を尊重する意識の涵養、コミュニケーション能力の向上が求められている¹³⁾中、「人と関わる体験」をより一層重ねることが看護の専門職となるうえで重要であり、看護学生が学習者として今後も成長を続けていくうえでも欠かすことができないものとする。そして、このような「人と関わる体験」によってコミュニケーション能力を向上させることは、豊かな人間性を創り出すとともに看護職を目指すものとしての資質を培うことにもつながる。このことは、今回の調査で「人と関わる体験」のある者は、看護職としての職業意識が高い傾向にあったことから伺える。

このほか、看護学生が他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心、いわゆる「他者意識」の合計点は、今回の調査結果では $26.6 \pm 5.3 / 35$ 点であり、辻⁵⁾による一般学生を対象とした平均値の22.6~22.7点と比較して高い値であることが明らかとなった。このことから、将来看護職をめざす看護学生は、一般学生に比べて他者への内面への意識や関心が高いことを再確認した。

「人と関わる」ことによって、自分と他者との関係性が培われる。他者の気持ちを通りながら感じ、自らその人の気持ちを感じとることができる人が看護職には求められる。しかし、今回の調査結果では「人と関わる体験」と内的他者意識との明らかな関連は認められなかった。今後も引き続き調査を続け、関係性を確認していきたい。

3. 『未来看護塾』の活動に対する今後への期待

現在の看護教育カリキュラムにおいては、看護の対象となるその人の生活を知り、さまざまな人々との関係作りを学ぶ体験ができる科目は限られている。そのような中、生活者の視点でその人のニーズを把握し、援助の必要性に気づく「感性」をいかに育てるかは、これからの未来の看護を担う看護学生には特に重要であると考えられる。そのような中で生まれた『未来看護塾』の活動は、着実に看護学生および地域の中へと浸透しつつある。

今回の調査によって、『未来看護塾』などのボランティア活動は参加した看護学生の「感性」を高め、「コミュニケーション力」を向上させ、看護の基本を自らの体験の中で学べるという教育的な効果が見出された。『未来看護塾』の活動は、「人と関わる体験」のひとつともいえる。しかし、他の「人と関わる体験」としてあげたサークル活動、部活動、アルバイトなどとは異なり、人と看護の両方に関わる体験ともいえる。特に、『未来看護塾』では同学部の1年生から4年生までの看護学生がチームとなり、常に上級生との看護ボランティア活動を共にしている。そのような活動の中で、参加学生は教科書だけでは学べない技を無意識のうちに獲得し、看護力を向上させることにもつながっている。このことは、他のボランティア活動では得られない学びであるとも考えている。

また、『未来看護塾』では地域の高齢者を対象として、健康支援活動の企画と実施も定期的に行っている。今回の調査におけるボランティア活動による学びの中で、「世代の違う者が交流できる機会をもっと増やしていくことが互いにより刺激になる」という意見もみられた。朝長ら¹⁴⁾は、ボランティアによる支援を受けた患者への効果を指摘しており、病院ボランティア導入は患者満足のために有効であるとも述べている。このように、ボランティア活動は、看護学生にだけに効果をもたらすだけでなく、対象者にもよい効果となり、相互作用となっているとも考えられる。まさしく、『未来看護塾』における健康支援活動は、世代や健康状態などさまざまな人々との交流を通して、互いに刺激し成長し合える活動の場といえる。

以上のように、『未来看護塾』の活動は地域に根ざしたものであり、自らの「感性」や「人間性」を豊かに育み「看護力」の向上を培うと考える。このような活動は、地域に在住する人々の健康な生活を支える活動の一助と

もなっており、今後益々地域貢献へとつなげていくことも期待される。一人でも多くの看護学生が『未来看護塾』の活動に参加できるよう、具体的に支援環境を整えていくことが必要である。

V. 結 語

今回は、『未来看護塾』の活動の一端を振り返るとともに、ボランティア活動の体験が看護学生にもたらす効果を明らかにした。また、ボランティア活動に関わらず「人と関わる体験」は看護職としての「職業意識」に影響を与えることも示唆された。

今後は、看護学生が「人と関わる体験」をより多く持つよう授業や実習の中で工夫し組み入れていきたい。また、『未来看護塾』の活動によって、1人でも多くの看護学生が「感性」や「人間性」を磨き、「看護力」の向上へとつながるよう支えていきたい。

謝 辞

本研究や活動にあたり、多大なるご協力とご支援をいただきありがとうございます各関係機関の皆様には深く感謝申し上げます。また、本調査にご協力いただきました地域の皆様、看護学生の皆様に感謝申し上げます。

なお、『未来看護塾』の活動は、平成16年発足当初より文部科学省現代GP採択「スチューデントファーム『近江楽座』」の活動のひとつとして支援を受けている。

参考文献

- 1) 佐藤真澄, 松田日登美, 柿原加世子: 看護短大生における生活体験および生活習慣の変化—「基礎看護技術」の及ぼす影響—, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 第13号, 1-10, 2002.
- 2) 野崎智恵子, 布佐真理子, 他: 1年間の経過からみた看護大学生の社会的スキルと自己効力感, 生活体験の関連, 東北大学医療短期大学部紀要, 11(2), 237-243, 2002.
- 3) 野々村典子, 猪又克子: 看護技術と学生の生活技術との関連, 一手指の動き—, 北里大学看護学部学術雑誌, 1(1), 11-18, 1992.
- 4) 氏家幸子, 阿曾洋子: 学生の入学時の生活関連動作と看護技術実習の実態, 第14回日本看護学会集録—看護教育—, 281-284, 1983.
- 5) 戸田弘二編: 3. 対人態度, 共感性・他者意識 (辻平治郎), 心理測定尺度集II (堀洋道監修), 131-135, サイエンス社, 2001.
- 6) 伊丹君和, 他: 看護学生における生活体験・対人関係の実態と他者意識との関連, 第36回日本看護学会

- 論文集（看護教育），209 - 211，2005.
- 7) 香春知永，他：ヘルスボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方，聖路加看護学会誌，9（1），11-18，2005.
 - 8) 波多野梗子，他：看護婦の熟達化と職業的同一性，日本看護科学誌，11（3），130-132，1991.
 - 9) 三瓶まり，他：ボランティア体験が学生にもたらす教育効果（I），鳥取大学医療技術短期大学部紀要，32号，9-15，2000.
 - 10) 榎本朋子，他：ボランティア活動と自己教育力との関連について，日本看護研究学会雑誌27（3），74，2004.
 - 11) 増田信代，他：看護学生のボランティア体験実習に対する意識-2年課程の学生の実習ご調査より-，日本看護学会誌，14（1），45-50，2004.
 - 12) 経済企画庁編：国民生活白書-ボランティアが深める好縁-，23，2000.
 - 13) 看護行政研究会監修：看護六法，新日本法規，1122-1123，2006.
 - 14) 朝長純子，他：長崎大学医学部附属病院における患者のニーズとボランティア導入効果-アンケート調査からの評価-，第31回日本看護学会論文集（看護管理），132-135，2000.
 - 15) 渡辺晴美，山田皓子，沼沢さとみ：高齢者にとっての外食・調理食の意義，山形県公衆衛生学会第31回公演集，61-62，2005.
 - 16) 成瀬かおる，他：病院・施設ボランティア活動を継続する看護学生の体験の構造，第35回日本看護学会論文集（看護教育），83-85，2005.
 - 17) 佐藤真澄，他：看護短大生における生活体験および生活習慣の変化-「基礎看護技術」の及ぼす影響-，日本赤十字愛知短期大学紀要，13，1-10，2002.

Effects of the Activities of the “Mirai-Kango-Juku” (A volunteer group composed of nursing students at The University of Shiga Prefecture), and the Experiences of Relationship with others on the Nursing Students

Kimiwa Itami¹⁾, Emu Suzuki²⁾, Kie Takami³⁾, Kumiko Toyoda¹⁾,
Mikiko Kurushima¹⁾, Kanako Honda¹⁾, Miwako Etou¹⁾

¹⁾ School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

²⁾ Seirei Mikatahara General Hospital

³⁾ The Hospital of Hyogo College of Medicine

Key Words experiences of relationship with others , educational effects, the nursing students, volunteer